四国の四つのパゴダ
―眉山公園・善通寺・石手寺・吸江寺のパゴダ―

小 幡　尚（高知大学教育研究部教授／高知海南史学会）

Four Pagodas in Shikoku
―Bizan Park, Zentsūji, Ishiteji, and Gyūkōji Pagodas

Hisashi OBATA
Professor, Research and Education Faculty, Kochi University

Within the precincts of Zentsūji Temple (75th temple, Kagawa Prefecture) and Ishite Temple (51st temple, Ehime Prefecture) are pagodas. A pagoda is a Buddhist monument that is widely seen in Myanmar (formerly known as Burma). This article examines the history and meaning of these two pagodas, plus those in Bizan Park (Tokushima Prefecture) and Gyūkōji Temple (Kochi Prefecture), as the "four pagodas".

To understand why the four pagodas were built, it is necessary to look at the war history of the 55th Division during the Asia-Pacific War. The division was formed in 1940 in Zentsūji City (Kagawa Prefecture) by soldiers recruited from the four prefectures of Shikoku. They landed in northern Vietnam in November 1941 and then took part in the battle in Burma, but by the time of their defeat about 80 percent of their total of about 20,000 were said to have been killed in the war.

After the war, the 55th Division and other soldiers who returned to Japan from Burma, in cooperation with the bereaved families, built a memorial tower in their hometown to commemorate their "comrades-in-arms" who died in the region, modeled after the pagodas seen in Burma. These are the four pagodas. They were built from 1958 to 1983 in Tokushima, Kagawa, Ehime, and Kochi prefecture, in that order.

In Shikoku, two of the four pagodas were built in the precincts of the temple to commemorate the war dead in the distant land of Burma. This indicates that the temple functioned as a place for memorializing the war dead after the war. Little attention has been paid to this function of the temple and so it is necessary to further investigate this point in the future.

はじめに

75番札所である善通寺（香川県）と51番札所の石手寺（愛媛県）の境内には、パゴダが建っている。パゴダとは、ミャンマー（かつてのビルマ）に広く見られる形式の塔状の建造物であり、「卒塔婆（そとば）の変形として建てられた仏塔」（『デジタル大辞泉』）のことである。

パゴダの前にある石碑の銘文によれば、善通寺のパゴダの名称は「ビルマ戦歿者慰霊塔」であり、1970年に建てられた。同様に、石手寺のパゴダは「愛媛県ビルマ戦没者慰霊塔」で、1979年の建立である。

ここから分かるように、これらのパゴダはアジア・太平洋戦争下のビルマ戦線で命を落とした戦没者たちを慰霊するために建てられた建造物なのである。これらは、どのような経緯と理由で両寺の境内に建設されたのであろうか。

それを明らかにするためには、この二つのパゴダに、眉山公園（徳島県）[(1)]と吸江寺（高知県）[(2)]にあるものを加え、「四つのパゴダ」として捉える必要がある。

眉山公園のパゴダの名称は「平和記念塔パゴダ」で、1958年の建設である（塔内にあるパネルによる）。吸江寺のものは「高知平和パゴダ」（パゴダ前の石碑銘文による）で、1983年に建てられている。この二つも、ビルマ戦線の戦没者の霊を慰めるために建てられた。

本稿は、「四つのパゴダ」について、来歴に関する基礎的史実を確認し、その意義を考えるものである。

Ⅰ　四国とビルマ戦線

まず、「四つのパゴダ」が慰霊の対象とする戦没者について確認したい。そのためには、第55師団について知る必要がある。

第55師団（秘匿名は「楯」、1943年中頃より「壮」）は、1940年半ば、「北満国境に駐とんしていた第11師団及び中支湖北にあった第40師団のあと詰めとして」創設されることになり、同年「８月10日、善通寺の留守第11師団において編成」された。「師団は３コ単位編成で、歩兵第112連隊を丸亀、歩兵第143連隊を徳島、歩兵第144連隊を高知でそれぞれ編成した」。「その連隊番号は、第11師団の歩兵連隊番号に100の数字を加えたものであった」。騎兵・山砲兵・工兵・輜重兵の特科連隊は、「11師団の各連隊留守隊において編成された」[3]。松山では編制が行なわれなかったが、愛媛県民には「特科部隊特に山砲兵連隊に入隊した者が多かった」という[4]。55師団は、「四国人によって編制された師団」といえるのである。

1941年11月26日、同師団の主力は、北部インドシナのハイフォンに上陸した。この時、「歩兵第144連隊基幹の部隊は大本営直轄の南海支隊となり、グアム島に向かっていた」[5]。144連隊を欠いた状態の55師団は、アジア・太平洋戦争の開戦後、同年12月27日にタイのバンコクに到着した。1942年１月にはビルマ進攻作戦に参加し、同国に入った。その後、同師団は、ビルマ国内で戦歴を重ねた。

1944年１月には、144連隊が同師団に復帰した。このころ、インパール作戦（同年３～７月）が準備されていた[6]。55師団は、「この作戦を容易にするため当面の英印軍はもちろん、遠く後方兵団をもなるべく多く、アキャブ方面に吸引するための作戦（第２次アキャブ作戦）をとることになった」。この作戦は大きく失敗し、インパール作戦も敗北に終わった。そのため、同師団は「転進」を余儀なくされ、これ以後過酷な状況の下での敗走を繰り返すことになる。

1945年７月には、同師団はシッタン河を東へ渡河し、その際に大きな犠牲を出した[7]。敗戦を迎えた後、「各部隊は武装解除され、英印軍の指示する労務作業に従事しながら復員を待ち、昭和21年５月から翌年５月にかけて、逐次、懐かしの祖国の土を踏んで帰還した」[8]。

ここまで見たような戦歴を有する55師団の被った人的な被害については、次のように言われている。すなわち、「ビルマ作戦に参加した第55師団の総人員は20,259名、戦没者は16,311名、故国に生還した者はわずか3,948名であった」[9]。

もちろん、ビルマで戦没した四国出身者は、55師団に属する兵士ばかりではない。1955年の厚生省引揚援護局による統計[10]によれば、徳島・香川・愛媛・高知の各県の「ビルマ方面戦没者数」は、それぞれ5,318、5,320、5,619、3,048（合計19,305）である。

ビルマで亡くなった四国各県出身者の正確な数は、現在でもはっきりしておらず、これとは異なる「数」も多く存する。パ

図１　善通寺のパゴダ
（※筆者撮影、以下同じ）

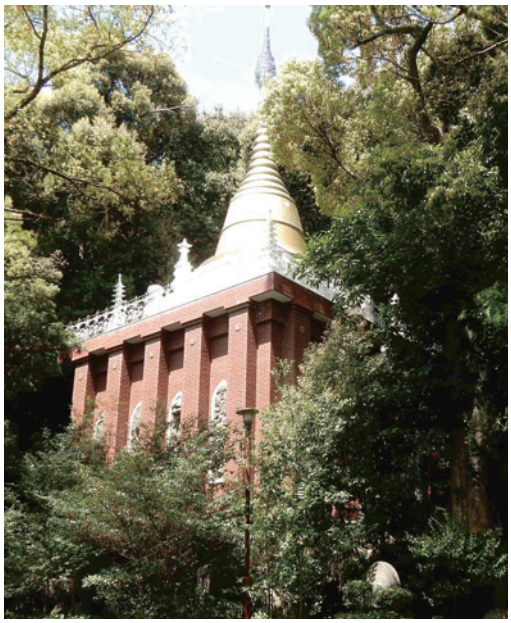

図２　石手寺のパゴダ

図３　眉山公園のパゴダ

ゴダ内の説明板の記述によれば、徳島県のビルマ戦没者は6,216名だという。[11] 1961年に徳島県ビルマ会（後述）が刊行した三河政雄編『大東亜戦争体験記録集　パゴダに祈る』巻末の「ビルマ地域戦歿者名簿」では5,220名とされている。パゴダ内の「鎮魂　愛媛県ビルマ戦没者」（2009年５月設置）には、愛媛県の戦没者として5,526名の氏名が記されている。[12] 1993年１月15日の『高知新聞』の記事[13]には、「県厚生援護課によると、ミャンマーにおける本県関係の戦没者は陸軍軍人2,936人、陸軍軍属23人、海軍軍人38人、海軍軍属１人の合計2,998人」とされている。また、1983年の同紙に掲載された「高知パゴダ会会長」へのインタビュー記事[14]では、ビルマ戦線の「戦没者は県下全市町村に及び、その数3,045人。戦線に投入されて無事生還した県人は５人に１人」とされている。

図４　吸江寺のパゴダ

Ⅱ　ビルマ戦線戦没者の慰霊とパゴダの建立

ここでは、ビルマから帰還した兵士たちの戦後の動向からパゴダの建設に至るまでの過程を見ていく。

先に述べたように、ビルマ戦線で敗戦を迎えた兵士たちが日本に帰還したのは1946年以降のことである。四国出身兵士の復員直後の状況については不詳である。1950年代半ば以降、彼らは団体を組織し始める。

徳島県内におけるパゴダ建設の資金を集める動きを報じる1956年７月29日の新聞記事[15]には、「県ビルマ会」が登場する。これが、同県のビルマ帰還者により作られた組織だと思われる。いつの時点で結成されたのかははっきりしない。会長は本庄勢兵衛である。[16] 本庄は、1911年生まれ。ビルマ戦線で143連隊第６中隊に所属していたという。[17]

香川県ビルマ会が発足したのは1956年である。発足時の会長麻田保英によれば、以下のような経緯であるという。[18] 1948年春に、「私たち楯八四一五部隊（＝112連隊、引用者註）第一大隊の生残りの者は、ご遺族の方数人を加えて、丸亀市富屋町の善照寺に各人食を持ち寄り、食事情の悪い当時ながら慰霊祭を行ない、会食をした」。「その後も県下各地区で各隊ごとにそれぞれ行なわれて」いた。1956年、香川県内の「各地区、各隊の戦友会を連合して香川県ビルマ会が発足」し、「私が会長に」なった。麻田は、112連隊付の軍医として1942年12月にビルマへ渡り、戦傷を受けたために1944年４月に帰国している。[19]

愛媛県でも、ビルマから「生きて帰った人たちは、各部隊ごとに、戦死した友の霊を慰めようと定期的な活動をしていた」。[20] 1972年に、「ビルマに残っている遺骨を収集するため」、「戦友ら十人余りで」ビルマ会を作ったという。[21] 会長である藤井徳二郎は、1913年松山市生まれ。1941年10月に善通寺の山砲兵第55連隊に応召され、11月には仏領インドシナに上陸している。翌1942年１月にビルマに入り、以後同国に留まった。1945年８月にシッタン河を渡河した後、兵站病院に入院した。1947年５月に松山に帰還している。[22]

高知県では、1973年に高知県ビルマ戦友連絡協議会が発足している。同年11月28日、同会の設立総会が「太平洋戦争中ビルマ戦線に出征していた人や遺族ら約百五十人が出席」して開かれ、「役員や遺骨収集団の派遣などについて話し合」われた。[23] 会長には町田速雄が就任した。町田は、1909年生まれ。京都帝国大学医学部を卒業した後、「召集軍医として開戦から終戦までビルマ戦線にとどまった」。2005年12月に没している。[24]

同協議会によるビルマ戦没者慰霊祭の開催を報じる1976年８月23日の新聞記事では、同会が活動の一環として「県下に散在する遺家族の住所なども調べてきた」ことを紹介した上で、それがほぼ把握できたので、「ことしから慰霊祭に遺家族も招くことにした」とある。[25]

ビルマ戦線から帰還した兵士たちの組織は、諸部隊を単位とする比較的小さなものから出発し、1950年代中葉以降に県全体の組織へと拡大していった。また、当初は帰還者、すなわち戦場体験者による組織であったが、高知県の例に見られるように、次第に遺家族もその成員とする組織となっていった。

これらの組織は、結成当初において戦地に残る「戦友」の遺骨の収集を主たる目的に掲げることが多く、

そのためにビルマの訪問を強く希望した。組織が拡充していき、活動が多様になっていく中で、遺骨の収集も含め、かつての戦地における戦没者の慰霊を目的とする集団での戦地訪問が行なわれるようになった。[26]

四国の関係者が、ビルマの戦地を戦後初めて訪れたのは、1963年のことのようである。「楯山砲ビルマ会徳島地区　中井武八郎」が1980年に記したところによれば、「わが徳島県は、戦後始(ママ)めて昭和三十八年一月に四国ビルマ戦跡巡拝団として中心的改割を果たし、故本庄勢兵衛氏ほか愛媛、香川県より一名宛の参加を得、総員十二名（内遺族四名）が初めてビルマに慰霊団として入国し」たという。[27]

1970年１月には、香川県ビルマ会が、ビルマ英霊巡拝慰霊団（27名）を組織し、10日間の日程で戦地訪問を行なった。[28] これ以降、1990年に至るまでに７回の「慰霊巡拝」を行なっている。[29]

高知県のビルマ帰還者・遺族たちは、1977年から戦地訪問を行なっている。これは同年に結成された高知県ビルマ英霊顕彰会（後述）によるものである。最初の訪問は11月28日から12月10日までの日程で行なわれ、「遺族五人、戦友十人」がミャンマー各地を巡った。[30] このような戦地訪問は、これ以降1993年に至るまで「ほぼ毎年」14回にわたって実施されている。[31]

これらの「訪問団」には、四国の他県、さらには四国以外の地域の関係者も参加しており、各県だけで閉じているものではなかった。また、四国の関係者が他地域の「訪問団」に参加することも多かった。戦地訪問は、この後も断続的に継続されていくが、その全貌は現時点においては詳らかではない。

次に、四つのパゴダの建設過程について、時系列に沿って述べていく。

徳島県においてパゴダ建設が発案されたのは、1953年のことだという。[32] すでに述べたように、1956年７月には徳島ビルマ会による建設資金の募集が報道されている。[33] この記事は、「県ビルマ会の一行が小型宣伝カーとオート三輪三台をつらねて」パゴダ建設の資金提供を「徳島市民に呼びかけた」ことを報じるものである。ここには、長尾新九郎徳島市長が各方面に協力を求めていること、「目標額七百万円のうち、四百万円がすでに集まった」ことなどが記されている。

同年８月16日には、「ビルマ政府官房長官ウー・シャント氏から長尾徳島市長に『パゴダ建設に期待している』との手紙が届いた」ことが報じられた。[34] これは、「去る五月、長尾市長が当時のビルマ首相ウ・ヌー氏にパゴダ建設についの(ママ)計画を書き送った返事」なのだという。

建設場所が現在地となる経緯については不明である。建設が始まったのは、1957年４月だという。[35] 眉山ロープウエーが近く完成することを報じる1957年10月26日の新聞記事[36]には、「県ビルマ会で同山頂に建設中のパゴダも工事が進んでいる」との記述がある。

1958年５月１日に羽田空港を発ちビルマに向かった「県ビルマ会会長本庄勢兵衛、県仏教会会長島村奉雅両氏は」、同月２日に「ウ・ヌー首相官邸で原大使夫妻とともに、仏舎利分与式典に出席、首相から三包の仏舎利を贈られた」。[37] これは、同月16日に徳島県に到着している。[38]

同月18日には、パゴダの開塔式が行なわれた。「午後一時から約三百人の稚児や詠歌隊が徳島駅前－天神下にかけて練供養を行ったのち」、「ウ・ヌー・ビルマ首相からおくられた仏舎利を仮安置所の潮音寺（同市西山手町）から」移し、新町小学校校庭で開塔落慶式・慰霊祭を行ない、その後「眉山山頂でパゴダに仏舎利を安置、入仏式と英霊奉安式を行」なったという。[39]

次に、香川県の動きを見る。麻田保英によれば、先述した四国ビルマ戦跡巡拝団が活動している1963年頃には「パゴダ建立の要望も強くなり」、1964年のビルマ会の「総会の席上、各地区役員及び出席者の緊急動議が出され、『記念碑』でもという声が出たりし」、「その結果徳島に匹敵するようなものをということにな」ったという。[40] 1966年には、建設地についての議論が行なわれ、高松の屋島頂上・栗林公園、坂出の聖通寺山頂、丸亀の丸亀城内、観音寺の琴弾公園、琴平の琴平宮の山中、多度津の桃陵公園、善通寺の護国神社境内などが候補地に挙げられた。

1968年の総会において、パゴダ建設の具体案が決まる。「終戦二十五周年」の1970年８月15日に「完成落慶法要をいとなむことにし」、建設場所を「弘法大師生誕千二百年祭記念事業の一環として、真言宗総本山善通寺境内の一角」とする、というものであった。決定の後、「当時の管長亀谷宥英猊下をお訪ねして、その計画をお話してお願いしたところ、ご快諾を得て現在の地点が決定」されたという。

1969年４月１日には、香川県ビルマ英霊顕彰会名でビルマ戦歿者慰霊塔建立趣意書が発表された。同会は、パゴダ建設のために新たに結成された組織である。「会則」によれば、同会は「ビルマに於いて戦没せ

る香川県出身者始め各都道府県出身者の慰霊塔建立を目的と」し、「目的に賛同するビルマ方面帰還者並びにその主旨に賛同する者をもって構成する」こととしている。会長には麻田が就いた。[41]

同年８月20日には起工式が行なわれている。この式には、ビルマ会の役員をはじめ、「善通寺市長ら来賓合わせて四十余人が参列」し、「亀谷同寺管長ら十人の僧りょう（ママ）が奉仕、仏式で行なわれた」。[42]

ところで、すでに述べたように、1970年１月に、香川県ビルマ会による戦地訪問が行なわれている。この時に、後にパゴダに安置される仏像を入手している。新聞報道によれば、ビルマのネ・ウィン首相が、「両国の平和と親善を祈って（１月、引用者註）十日夜、慰霊団が泊ったラングーンのホテルへ仏像を届けた」という。同首相からは、すでに前年10月「国宝級といわれる仏舎利、ぼだい樹の葉二放、釈迦生誕の地とねはんの地の土、パゴダの先端につける飾りが贈られて」いた。[43]

1970年８月15日に、慰霊塔の開眼法要・竣工式が執行された。その様子は、「パゴダの除幕落慶法要は午前八時半から麻田会長らが参列して行なわれ、慰霊祭に午後一時から善通寺の御影堂にウ・バシュエ駐日ビルマ大使夫妻、金子知事、平尾善通寺市長、森山自衛隊善通寺駐とん地司令ら来賓九十余人と遺族四百余人、会員二百五十余人が参列、蓮生同寺管長が導師となって読経、平尾市長らが祭文を読み上げ戦没者の霊を慰めた」、[44]と報じられた。

愛媛県ビルマ会においては、1976年初頭頃に、「場所未定のままで、愛媛パゴダを建立すべしと云う意見が会員内で自然昂まりはじめた」という。同年７月には、建設場所として石手寺境内を挙げる声が上がり、会員たちが「石手寺隣家の製粉会社川久保社長の紹介を得て石手寺加藤俊行住職に面接し、パゴダ建設の念願を披歴」したところ、賛意を得たという。[45]

石手寺に建設することを決定した後、境内のどこに建設するかについてはなかなか決まらなかった。1977年５月23日に「パゴダ建設地を石手寺山上の『火ノ神様』の台地の直ぐ西側と決定」したが、同年７月13日には「山麓の西方に変更」している。

同年８月14日には、愛媛県護国神社において愛媛県パゴダ建設会の発会式が行なわれた。これは、ビルマ会の呼びかけによって開催されたもので、「会員と遺族ら約二百人が出席」したという。[46]この日に採択された「決議」によれば、ビルマ戦線で戦没した「愛媛県出身者五千有余の戦友の霊に対し心より冥福を祈ると共にこれら同胞の墓標でもあるパゴダを霊山石手寺境内に建立するため今日生のある吾々戦友が中心となりご遺族並に一般の方々の協力を得て活発な募金活動を起し」1979年８月の完成を目指すこととした。

同年10月11日には、建設会の代表が「石手寺住職加藤俊行氏、及び信徒会会長林健治郎氏、石手寺先達会や事務局関係者」と面会して「建設に関する具体的な報告を行い、今後のご協力と建設の借地について正式に懇請」して同意を得ている。

1978年８月12日には、建設地の位置が「お釈迦堂の建立地」に確定する。「敷地変更により、お釈迦堂の移転と、樹木の転植、西国三十三ヵ所のお地蔵さんなど」の移転が必要となった。同月20日には、地鎮祭が「石手寺による仏式」によって行なわれた。

この頃、建設会と愛媛県・松山市との間で建設をめぐる諸手続についての交渉が行なわれていた。同年７月15日には、「建設委員会を開催し、県及び松山市の各建設関係当局に提出する開発許可書、風致地区内の開発承諾書、建築確認書など申請書類の作成に着手」し、10月３日には「認可書類を受領」している。

1979年１月には愛媛県仏舎利奉戴ビルマ戦跡巡拝団が組織された。同団は、「仏舎利及びビルマ国仏像の奉戴」「各地戦跡慰霊巡拝」を目的とし、団長は藤井徳二郎が務めた。同月17日に松山を発ち、25日には仏舎利・仏像を「ウ・アデイサ・ウインサ大僧正及び元日本駐在大使ウ・チ・ココ氏の御配意によりペグー山麓のジョービュー寺院にて奉戴」（パゴダ前の石碑銘文）し、28日に帰還した。松山にかえってすぐに「石手寺に向い、仏舎利、仏像位牌を奉戴し、石手寺側より加藤俊行師以下多数の丁重なお出迎えを受けて本坊に安置」した。

同年７月７日に行なわれた落慶式典の打ち合せでは、慰霊塔を「会の総意として石手寺に寄贈する」ことが決められた。

同年８月12日に、愛媛県ビルマ戦没者慰霊塔落慶式並に追悼法要が執行された。その態様については、「式には遺族関係者をはじめ石手寺信者会の人々ら三千五百人が参列。ご詠歌が流れ、人々が見守るなかを同寺の講堂から仏舎利、仏像が静かに運び出され、パゴダ内に安置された」、と地元紙で報道されている。[47]

石手寺のパゴダの建設責任者は、ビルマにおいて工兵第55連隊に所属していた西山正志であった。[48] 藤井は、パゴダの建設工事が「戦友西山正志氏の総指揮による元ビルマ派遣軍楯工兵隊を中軸として」行なわれたと落慶式の祭文の中で述べている。

高知県でパゴダ建設へ向けた動きが現れるのは、1977年のことである。同年６月26日、県ビルマ戦没者33回忌慰霊祭が開催され、それに続けて県ビルマ英霊顕彰会結成総会が開かれた。[49] 顕彰会は、県ビルマ戦友連絡協議会と「同戦没者遺族有志が中心になって」結成準備を進めてきたものだという。[50] 総会では、町田速雄を会長に選出し、「恩給、援護などの調査研究、機関誌の発行などの事業内容を盛り込んだ会則を承認」、さらに「①戦没者を慰霊するパゴダ建設に前向きに取り組む②来年一月、初の本県墓参団『ビルマ戦跡巡拝団』を派遣することなどを決議し」た。[51]

その後の動向について詳しいことは分からない。1979年７月22日の「県ビルマ英霊顕彰会（通称パゴダ会、町田速雄会長・七百人）」の慰霊祭を報じる地元紙の記事[52]では、慰霊祭後の総会で「パゴダを建設するため、募金活動に一層力を入れること」を申し合わせたとされている。この記事中の町田会長のコメントには、「四国四県でこうしたパゴダがないのは高知だけだ」とある。四国の他県の状況を十分に意識していたことが分かる。

1981年の顕彰会の総会を報じる新聞記事[53]では、「世界平和祈願のパゴダを高知市五台山の『吸江寺』に建てることにな」ったとされている。建設場所の選定過程については不詳である。

同年12月１日には吸江寺で起工式が行なわれている。[54] 1982年11月２日には、パゴダが完成し上棟式が行なわれた。それを報じる新聞記事によれば、「塔頭にはビルマから届いた金色の塔冠」が取り付けてあるという。[55] 1983年２月26日には、「本尊の延命地蔵を吸江寺本堂からパゴダに移す」本尊遷座式が行なわれた。この地蔵は、「重要文化財に指定されている木造座像」だという。[56]

同年４月２日に落慶法要が行なわれた。[57] 同年８月の町田のインタビュー記事[58]によれば、建設地は同寺の「旧地蔵堂跡地」であり、パゴダの中には延命地蔵菩薩を中心に、「数百体の高さ二十三センチ、金ぱくの観音像が並」び、「そのすべてに戦没者の俗名が記されている」という。また、パゴダ会で「二千名近い人々の遺族を捜している」が「まだ千人余の遺族の消息はつかめていない」のだという。

このパゴダの「設計者」は「元第55師団工兵第55聯隊　窪内敬三」である。[59] 善通寺のものと同様に建設過程に「戦友」が関わっているのである。

過酷なビルマ戦線から生還できた人々は、帰還の後、旧軍時代の諸部隊などを単位として集まりを持つようになった。それらは少しずつ組織として形が整えられていき、1950年代半ば以降、県を単位とするビルマ会が発足するようになった。各県の「ビルマ会」は、同地で命を落としたかつての「戦友」の慰霊を主たる目的とし、戦地訪問などの活動を行なった。当初は、帰還者のみの組織であったが、次第に遺族も参加するようになった。活動を続ける中で、帰還者・戦没者の故郷である四国各県に慰霊塔を建てることが目指されるようになり、その形態として、戦地であったビルマに多く見られるパゴダが選ばれたのである。県によって濃淡があるものの、それぞれのパゴダは、ビルマとの「繋がり」を重視しながら建立されていった。

Ⅲ　パゴダ建立後の動向

ここでは、パゴダが建設された後の動向について簡略に見ておきたい。

すでに述べたように、パゴダが完成した後も、帰還者・遺族による戦地訪問は続いていた。そのような活動を続ける中で、かつての戦地であるミャンマーに慰霊碑を建立するという事例が見られる。以下、そのような事例の一つとして香川県の動向を見る。

香川ビルマ会の会員である福岡清が1990年に記したところによれば、「現地慰霊碑建立については、過去六回に亙りビルマ各地で慰霊を行い、充分意を尽くしてきたものの、形として何物も残す事が出来ておらず、この事が常に心から離れず、昭和六十二年八月に行われたビルマ会総会に於て、ビルマの地に慰霊碑建立の件が動議され、出席者全員の賛同を得て可決され、席上、建設資金の募金が行われた」という。[60]

建設の決定からおよそ２年半の後、慰霊碑は完成した。先述のように、同会はパゴダの建立後もビルマの「戦跡巡拝」を続けていた。第７回の「慰霊巡拝」（1990年１月11日～18日）中の１月13日に慰霊碑竣工開眼法要が執行され、日本からは28名が参加した。慰霊碑の建設場所は、「ミャンマー中央部の古都マンダレー

の郊外」の「サガインヒルと称する丘の上」であった。「碑は現地の大理石で、高さ約三㍍」、「正面に総本山善通寺の蓮生善隆管長の筆による『慰霊』の文字、コンクリート製の台座には、麻田会長」による「銘文がはめ込まれている」という。[61] 香川県の帰還者・遺族は、このように善通寺を介して戦地と「故郷」を繋いだのである。

最後に、近年のパゴダをめぐる動静を見ておきたい。

敷地内にある掲示によれば、徳島のパゴダは1989年に「徳島県ビルマ会より、徳島県仏教会に移管され」ている。2020年８月の新聞報道[62]によれば、その後「県ビルマ会は会員の死亡などで、自然消滅の状態」となり、2008年に新たに「パゴダを守る会」が結成されたのだという。2009年には、同会によってパゴダの修復が行なわれた。現在、徳島のパゴダは帰還者・遺族以外の人々によって維持されているのである。

ビルマ戦線戦没者の遺児である宮崎七三子が2011年に記したところ[63]によれば、愛媛のパゴダで行なわれる「毎年の慰霊祭や毎月の清掃等」の参加者が「高齢化と共に」減ってきたことから、2000年に「遺児や賛同者」によって愛媛パゴダを守る会を発足させたという。さらに、2006年には「愛媛県ビルマ会と愛媛パゴダを守る会が合併」して愛媛パゴダ会となった。愛媛県では、ビルマ戦線戦没者の慰霊の主体が、「戦友」から「遺児」へとその範囲が拡大され、さらに「賛同者」も参加できるように変わったのである。

他の二県でも同様の変化が起こっているものと考えられよう。

むすびにかえて

本稿では、概略に止まるものの、「四つのパゴダ」建設の背景と経緯を明らかにしてきた。その背景とは、アジア・太平洋戦争下のビルマ戦線において、四国から戦地に渡った多くの兵士たちが命を落としたことである。戦後、故郷に生還した元兵士たちは、かつての「戦友」たちの霊を慰めるため、組織を作り、さまざまな活動を展開した。その活動の一つが、「故郷に慰霊塔を建立すること」であり、意匠としてパゴダが選ばれた。そして、その建立地として、慰霊にふさわしい聖なる地と認識された場所が選ばれた。四国の四県のうち、二県において札所寺院の境内が選定された。香川県・愛媛県の事例から、寺院側もパゴダの建立に協力的な姿勢を示したことを知ることができた。

札所寺院の二つと他の二つのパゴダは、帰還者と遺族たちによるビルマ戦没者の慰霊において、かつての戦地と故郷を媒介する役割を果たしたのである。

「四つのパゴダ」に関して、このようなアウトラインを示した上で、問題提起をしておきたい。まず、札所寺院について検討する際の視角に関することである。本稿に示した事例から、札所寺院が戦後において戦没者を慰霊する場として機能していたことは明らかである。札所寺院のこのような側面については、これまでほとんど注目されてこなかった。他の札所寺院の境内にも、戦没者を慰霊する碑などが設置された例がある。[64] その実態と意味について今後さらに検討していく必要があろう。

本稿で検討したのは、地域における戦没者慰霊のあり方の一事例ともいえる。地域における慰霊の実態についてさらに調査と研究を進め、その中に改めて札所寺院が果たした役割を位置づける必要がある。そうすることによって、「四つパゴダ」の意味についての考察をさらに深化させることができよう。今後も討究を続けたい。

註

(1) 徳島市の「中心市街地に接する標高290m前後の東西になだらかな丘陵地」の山頂付近に設けられた公園（徳島市公式ウェブサイト〈https://www.city.tokushima.tokushima.jp/shisetsu/park/bizan.html　2021/01/08閲覧〉による）。

(2) 高知市吸江に所在。吸江寺は、「鎌倉時代末から南北朝時代にかけて天皇や足利家からの帰依を受け活動した臨済宗の高僧、夢窓疎石が文保二年（一三一八）に土佐に下り、吸江庵を結んだことに始ま」る名刹（高知県立歴史民俗資料館編『企画展　開創700年記念　吸江寺』〈同館、2019年〉p３）。

(3) 陸上自衛隊第13師団司令部四国師団史編さん委員会編『四国師団史』（同司令部、1972年）p221。以下、とくに断らない限り、55師団の動向については同書p221～262による。

(4) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史　近代　下』（同県 1988年）p838。

(5) 同支隊は、後に55師団に復帰するまで、グアムからラバウル、そしてニューギニアへと転戦した（前掲『四国

師団史』p263～289)。後述するように、四国四県でビルマ方面戦没者数が最も少ないのが高知なのは、このためだと考えられる。

⑹　インパール作戦については、最新の成果であるNHKスペシャル取材班『戦慄の記録　インパール』(岩波書店、2018年）などを参照のこと。

⑺　この際に多くの兵士が死亡したことについて、小林倫太郎「徳島県・歩兵第一四三連隊　～ビルマ　濁流に散った敵中突破作戦」(NHK「戦争証言」プロジェクト『証言記録　兵士たちの戦争③』〈NHK出版、2009年〉)を参照のこと。

⑻　復員の状況については、112連隊に属していた稲沢達による「第五五師団の復員状況」(香川県ビルマ会『ビルマの夕映え　最終編』〈同会会長麻田保英、1990年〉p510～513）を参照のこと。

⑼　前掲『愛媛県史 近代 下』p847。前掲『四国師団史』p262も同数としている。

⑽　「附表三、ビルマ（インド及び雲南省を含む）方面戦没者数各県別表　昭和三〇・一一・一九調　引揚援護局」(上田天瑞『ビルマ戦跡巡礼記』〈ビルマ親善協会、1957年〉p102)。

⑾　「四国の戦跡を訪ねて　徳島・『平和記念塔パゴダ』　風化するビルマへの祈り」(『毎日新聞〔高知版〕』2020年８月18日）も同数としている。

⑿　愛媛県ビルマ会編『あゝビルマ』(同会事務局、1980年）所載の「愛媛県ビルマ戦歿者名簿（愛媛県ビルマ会)」(p329～356）に記されている氏名は5,501名分である。

⒀　「ミャンマーへ県慰霊団　あす出発　知事にあいさつ」。

⒁　「夏の語り部たち②　高知パゴダ会会長　町田速雄さん(74)」(８月13日)。パゴダ会については後述する。

⒂　「パゴダ建設に協力を　宣伝隊、街にくり出す」(『朝日新聞〔徳島版〕』)。

⒃　後述するように、1958年の時点の会長が本庄である。結成時の会長を示す資史料は未発見であるが、ここでは本庄であると推断した。

⒄　前掲『パゴダに祈る』p171。同書の発行者は本庄である。

⒅　「パゴダの建立経過　麻田保英」(香川県ビルマ会『パコダに捧ぐ　ビルマの夕映え』〈同会会長麻田保英、1972年〉p1-3)。

⒆　麻田保英『ビルマ戦線　ある軍医の陣中日誌』(麻田保英、1994年）による。

⒇　「戦友よパゴダで安らかに　二年後の完成めざし　建設会が活動を開始　県ビルマ会」(『愛媛新聞』1977年８月15日)。

(21)　「鎮魂のパゴダ　自分たちの手で　松山に建設へ　愛媛ビルマ会　『老いぬ内に…』　終戦記念日を機に決める」(『朝日新聞〔愛媛版〕』1977年８月16日)。

(22)　藤井徳二郎・藤井三栄子『シンゼイワ　青春は戦争なりき』(藤井徳二郎、1991年）による。

(23)　「県ビルマ戦友連絡協議会が発足」(『高知新聞』11月29日)。

(24)　「　」内は前掲『高知新聞』1983年８月13日付記事、他は上町病院（高知市上町、旧「町田外科診療所」「町田産研病院」）ウェブサイト（http://www.kamimachi-hp.or.jp/hmachida.html　2020/12/24閲覧）による。

(25)　「遺族とともに慰霊祭　三〇四三柱のめい福祈る　県ビルマ戦連協」(『高知新聞』)。

(26)　帰還者・遺族がかつての戦地を訪れる行為を示す用語としては、「戦地巡礼」等さまざまなものが使われている。ここでは、西村明「遺骨収集・戦地訪問と戦死者遺族ー死者と生者の時ー空間的隔たりに注目してー」(『昭和のくらし研究』No.６、2008年）に従い、「戦地訪問」に統一する。

　また、戦後の遺骨の帰還については、「勇士はここに眠れるか」編纂委員会編著『ビルマ、インド、タイ戦没者遺骨収集の記録　勇士はここに眠れるか』(全ビルマ戦友団体連絡協議会、1980年)、浜井和史『海外戦没者の戦後史　遺骨帰還と慰霊』(歴史文化ライブラリー〈吉川弘文館〉、2014年）を参照。

(27)　前掲『あゝビルマ』p289。

(28)　前掲『パゴダに捧ぐ』p473-477。

(29)　香川県ビルマ会『パコダに捧ぐ　ビルマの夕映え（続)』(同会会長麻田保英、1977年）p471-538、前掲『ビルマの夕映え　最終編』p535-618。

(30)　「現地へ慰霊団派遣　県ビルマ英霊顕彰会」(『高知新聞』1977年11月26日)。

(31)　「ミャンマーへ県慰霊団　あす出発　知事にあいさつ」(『高知新聞』1993年１月15日)。

(32)　「きょう盛大に開塔式　徳島　眉山山頂のパゴダ」(『朝日新聞〔徳島版〕』1958年５月18日)。この記事の中に、県ビルマ会が「五年前…建設運動をおこした」との記述がある。

(33)　前掲『朝日新聞〔徳島版〕』1956年７月29日付記事。

(34)　「パゴダ建設を激励　ビルマから徳島市へ」(『朝日新聞〔徳島版〕』)。

(35)　前掲『朝日新聞〔徳島版〕』1958年５月18日付記事。

(36)　「来月末までに初運転　完工急ぐ眉山ロープウエー」(『朝日新聞〔徳島版〕』)。

(37) 「ウ首相から仏舎利を受領　本庄氏のビルマ通信　互に最高の儀礼　金色の器に厳かな祈り」(『徳島新聞』1958年5月15日)。
(38) 前掲『朝日新聞〔徳島版〕』1958年5月18日記事。
(39) 「きょうパゴダ開塔式　池田夫妻も出席　戦没者を追悼」(『徳島新聞』1958年5月18日)・「〔広告〕パゴダ　きょう開塔式」(同紙同日)・「平和の塔　〝パゴダ〟ひらく　厳かに仏舎利安置　三千人が盛大な練供養」(同紙同月19日)による。
(40) 前掲「パゴダの建立経過　麻田保英」。以下、同じ。
(41) 前掲『パコダに捧ぐ』p2-3。
(42) 「ビルマに散った霊慰む　善通寺でパコ(ママ)ダ起工式」(『四国新聞』1969年8月21日夕刊)。前掲『パゴダに捧ぐ』は地鎮祭としている(p7)。
(43) 「ビルマのネ首相　戦没将兵の供養に仏像　現地訪問の慰霊団へ贈る」(『朝日新聞〔香川版〕』1970年1月21日)。
(44) 「パゴダの落慶法要営む　ビルマ大使も参列　なき戦友のめい福祈る　善通寺」(『四国新聞』1970年8月16日)。
(45) 前掲『あゝビルマ』p295-303。以下、とくに断らない限り本註に同じ。
(46) 前掲『愛媛新聞』1977年8月15日付記事。
(47) 「鎮魂のパゴダ落慶　松山・石手寺　ビルマ戦没県人5,500の慰霊塔　遺族関係者ら追悼法要」(『愛媛新聞』1979年8月13日)。
(48) 「走馬燈　元工兵五五聯隊　西山正志」(前掲『あゝビルマ』p61-62)。
(49) 「しめやかに県ビルマ戦没者33回忌慰霊祭　英霊顕彰会も発足」(『高知新聞』1977年6月27日)。
(50) 「『英霊顕彰会』を結成へ　二十六日県ビルマ戦没者慰霊祭」(『高知新聞』1977年6月22日)。
(51) 前掲『高知新聞』1977年6月27日付記事。
(52) 「供養にパゴダ建設　県ビルマ英霊顕彰会　慰霊祭で決意新た」(『高知新聞』1979年7月23日)。
(53) 「吸江寺にパゴダ建設決める　県ビルマ英霊顕彰会総会」(『高知新聞』1981年7月27日)。
(54) 「平和願ってパゴダ　五台山吸江寺に建立　県ビルマ英霊顕彰会が起工式」(『高知新聞』1981年12月2日)。
(55) 「戦没者の霊祭るパゴダ完成　高知市の吸江寺で上棟式」(『高知新聞』1982年11月3日)。
(56) 「境内のパゴダで本尊遷座式　高知市の吸江寺」(『高知新聞』1983年2月27日)
(57) 「平和パゴダの落慶法要　高知市吸江寺」(『高知新聞』1983年4月3日)。
(58) 前掲『高知新聞』1983年8月13日付記事。
(59) 歩兵第百四十四聯隊通信中隊誌編纂委員会編『歩兵第百四十四聯隊(高知)通信中隊誌』(同委員会、1986年)p734。
(60) 福岡「ビルマの聖地に念願の慰霊碑を建立」(前掲『ビルマの夕映え　最終編』p2)。
(61) 「異国の友よやすらかに　◇…ミャンマー激戦地見下ろす丘…◇　念願の戦没者慰霊碑建立」(同前p626-627)。
(62) 前掲『毎日新聞〔高知版〕』2020年8月18日付記事。以下、同じ。
(63) 「パゴダへの祈り」(愛媛ビルマ会編『戦友と遺児が語るビルマ戦への想い』〈同会、2011年〉)p66-69。
(64) 例えば、石手寺の境内(パゴダの隣)には、「硫黄島平和の碑」(1983年建立)がある。7番札所十楽寺(徳島県阿波市土成町高尾)境内には「第十三期海軍飛行予備学生戦歿者慰霊碑」・「同物故者霊碑」(1987年建立)がある。